



Title	食文化から考えるタイ社会
Author(s)	櫻井, 義秀; Sakurai, Yoshihide
Citation	Foods & food ingredients journal of Japan, 209(11), 1007-1016
Issue Date	2004-11
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/755">https://hdl.handle.net/2115/755</a>
Type	journal article
File Information	FIIJ_vol209.pdf



## 1 タイ人はタイ料理を作る？

### 1-1 タイ料理

タイ料理というのは、エスニック系でも個性の強いものらしく、世界中の大都市にタイ・レストランがある。5年前にベルギーのルーベンという小さな町で学会に参加した際、体調を崩し、なんとしても米が食べたくなくなった。旧市街のホテルの近辺に中華料理屋もインド料理屋もなかったの、タイ料理屋を見つけた時は嬉しかった。この種の店はたいていタイ人女性と結婚した現地の人が開業しているもので、味は確か。日本でもタイ料理店は人気があり、若い女性客を中心に混み合っているところが多いようだ。

私は東北タイの地域開発を研究している。社会学の大学教師なので、実のところ、食に人並み以上の知識も関心もあるわけではない。それでも、20年近くタイとつきあっているの、まあまあタイの食生活には親しんできた方だろう。多くの人がタイ料理を味わってタイに関心を持ってくれることを嬉しく思う半面、タイの屋台で一杯20バーツ(約60円弱)程度の一膳飯に10倍もの料金を払って日本で食べてくれる人は奇抜な人だとも思う。

この一膳飯には、鳥・豚・牛等の肉を唐辛子や野菜と炒めてご飯にのせたもの、鶏や豚肉を焼いたり、揚げたりしてご飯にかけたもの、チャーハンのようにご飯も炒めたもの等種類が多い。麺類では、小麦粉のバーミーや米粉のクィティヤオというそば(各スープ入り、汁をからめたもの、あんかけ風)。屋台はそれぞれ数品の品書きしかないの、適当にいすに座り、周りの屋台から、焼き魚(ナマズや川魚の塩焼き)、焼き鳥等の串もの、つまみ、酒等を頼むことができる。小腹に入れるなら一皿で十分。夜に2,3皿頼み、ビール1本飲んでも、6,70バーツであろうか。但し、タイの屋台は道路脇にあるから、車の騒音、排気ガス、ホコリを気にしない人向き。貝類などは調子が悪いとあたるのでやめた方がいい。

タイ料理の魅力は、パクチーをはじめ様々な香菜と大小の唐辛子ではっきり味付けされた前菜や、肉・魚介類の主菜、ココナッツ・ミルクを加えた南部系のスープやカレー、中華やベトナム料理由来の点心もの、東北タイのイサーン料理(鶏半身の丸焼きや、臓物煮込み、牛刺し等、ワイルドなものが多い)やソムタム(パパイヤ・サラダ)等、バラエティに富んでいることであろうか。タイの北部にはカントーク料理(ちゃぶ台で運ばれてくるチェンマイ王朝風定食)があり、バンコク等中部タイは、中華と中部タイ料理である。

北タイ・東北タイは餅米をふかして常食とし、中部・南タイではうるち米が好まれる。

日本の味の軸が甘いーしょっぱいであるとすれば、タイは甘いー辛いであろう。苦いと塩辛いはず。気温が高いこともあり、味が濃い方がうまいとされるようだ。ラーメンにも各自、一味とうがらし、ナンプラーという魚醤、酢、砂糖!を適宜ふりかけて、独特のうまみを作り出して食べるのがタイ風である。タイ料理は辛いというイメージがあるが、高級な料理はそれほど辛くないし、味も薄め。庶民の味は強烈で、東北タイには一口食べ

ただで汗が噴き出て、涙、鼻水が止まらず、しばらく舌が麻痺し、翌日の排便時に再度肛門で辛さを味わい苦しむような料理がある。青唐辛子にはくれぐれも注意されたい。

さて、タイという国自体、複合民族国家である。民族と言語の起源は中国の雲南省や福建・潮州に、仏教と王家の儀礼はインドから来た。インドシナ半島の中心にあるだけあって、中国文明とインド文明が出会った場所であり、そこに地域固有の文化が入り込み、タイの文化、とりわけ食文化を豊かなものにしていく。

タイの首都バンコクには、インド・中東の料理店、日本料理店、フランス・イタリア料理店なども軒を並べる。タイ旅行の楽しみは、遺跡巡りやビーチ滞在もさることながら、世界の食事をリーズナブルな値段で賞味することにおいてもいいのではないかな。

若い人、変わったものを食べたい人は屋台巡りや郷土食をすすめたい。東北タイであれば、ラープ・ヌア・ディップという牛刺しがある。結婚式や法事の早朝、とさつした牛で作る。メンダーというたがめをつぶして和えたおひたしは実に芳ばしい。サッカーボール程の大きさになるカイ・モット・デーという赤蟻の巣と野菜を煮込んだ鍋はまあまあ食べられる。米粒上の蟻の卵や蟻そのものがぷかぷかとスープに浮かび、蟻酸でなんともいえない酸っぱさが出る。その他、小説では田ネズミを焙ったものとか、大小各種の蛇を唐辛子でちりちりに炒めたものとか出てくるが、私は未だ食べたことがない。普通、皮だけ利用されるワニの肉を唐揚げで出すところもあるが、うまいものではない。

これらの類は珍味であり、常食ではない。もっと言えば、いわゆる料理店のタイ料理をタイの人達が常時食べているわけでもない。日本の家庭で、普通の日に寿司を握り、天ぷらを揚げ、魚貝の舟盛りで食事をするのがまずないのと同じである。

## 1-2 米作りと農村の生活

タイは総人口 6300 万人のうち、約 700 万人が首都バンコクに住み、76 県の県庁所在地（人口 2,3 万から 30 万人程）及び郡都（人口 2,3 千人）に住む人が町の生活者である。残りのおよそ人口の 4 分の 3 は、農村部（一部漁村）に住んでいる。町に住むか、村に住むか、さらには富裕層か貧困層か、属している社会階層により食生活もかなり違う。

タイの農家はこの 30 年ほどの間に、稲作の自給自足的な農業からキャッサバ等の家畜飼料やサトウキビ、果樹、野菜等の商品作物へ経営を多角化している。一見、農業の近代化のようであるが、農村人口が増えたために、土地無し農民が水田を作れない高地や山地に開拓村落を作った結果である。このような農家は、資材や種苗に初期投資がかかり、農産物市場に翻弄されながら、農産物を現金に換えなければならない。暮らしはかなり厳しい。

元来、タイの水田は米がとれるし、小魚、タニシ、小エビまでとれた。家の周りで野菜を作り、果樹を植え、鶏でも飼えば、食うことには困らない。東北タイの貧しいと言われる農村部を調査したときですら、前年の米を食べ尽くすことは殆どないと聞いた。およそ、飢饉とは無縁の豊穡な土地である。それでも、世界銀行の統計では東北部農村の貧困率は 1988 年で 48.4%にもなった。月収 473 バーツ（約 2000 円）以下の世帯では、必要カロリーを摂取できないからということらしい。余剰米を売ればそれだけの金にしかならないが、

食住で足りているので「自分たちがこれまで貧乏だとは思いませんでしたが、役所がそういうので貧しいのかな」と思うようになったらしい。しかし、現在、農民の大半は、テレビ、冷蔵庫、バイク等の耐久消費財を買い、子供達を中学・高校に通わせるために現金収入が必要になった。そうすると、米農家も貧しさを実感するようになったのである。

タイは熱帯のイメージが強いが、それはマレー半島に位置する中南部であり、北部・東北部は5月から11月の雨期と乾期に分かれるモンスーン型の気候である。雨期の降雨量も日本の3分の2程で多いとは言えない。中部と北部の灌漑施設は7,8割整っているが、東北タイではわずか5%である。タイの水田面積は日本のその約4倍であるが、稲作の生産性は約4分の1である。タイは世界の米輸出国であるが、人口が日本の半分であることと、タイ米の生産費が日本の約14分の1であることの結果である。米が極めて安い。

このような粗放的米栽培は自家消費である分にはよいが、現金収入を得ようとする1ライ(0.16ヘクタール)作って112バーツ(1990年ウドンターニー県、約500円)にしかならない。ところが、農家は平均で20ライ程度の水田しか所有していない。この時期、出面賃が高騰期で1日60バーツであった。要するに、最もリスクの少ない米生産で1年やっても、出稼ぎで1ヶ月働いて得る労賃分も稼げないのである。農業はわりに合わない。

タイは1985年以降、農業に立脚した工業国家を目指し、おりしも円高で日本企業がタイに大量進出したこともあり、1997年の経済危機まで年間7-12%の高度成長を遂げた。バンコクは近代都市に変貌し、高速道路や高層ビルの建築現場、工業団地の工場等で働く機会が大幅に拡大した。東北タイの農民は出稼ぎで得た金で内需拡大にも貢献した。

現在の農村の風景は、3ちゃん農業ならぬ、2ちゃん(じいちゃん、ばあちゃん)農業になる危険すらある。壮年世代が夫婦で出稼ぎに行くことが珍しくなく、その際、子供を祖父母に託していくからである。若い世代は中学卒業後、殆どが町に出る。親も農家を継がせようとは思わない。小作農民や条件不利地域の農民はなおさら農業に固執しない。平地の稲作農民も、森林伐採(40年前国土の半分を占めた森林が現在は4分の1程度)のために干害や洪水に苦しめられ、土壌流出等で土地がやせ、農業継続の条件は厳しい。

十数年前、住み込んだ調査村の富農の家で、私は毎朝卵焼きと蒸したもち米(東北タイではもち米食)を出してもらっていた。昼食は定食屋でクィテヤオ(米粉の麺)、夕食には魚か鶏のゲーン(スープ)がついた。私とその家の祖父、娘婿の中学教師が食べ、残ったおかずで家人が食事をしていた。その家は、豚、鶏を飼い、養魚池もある複合農業の篤農家だったので、ともかく食べるものには困らなかったが、普通の農家では米と若干のおかずだけだった。結婚式や法事、仏教の年中行事がある時のみ、ごちそうを食べたのである。

### 1-3 都市生活者の食事

村の人々が毎食、作って食べているのに対して、町の人々は作らない。週日三食とも外食の人が珍しくないし、夕食のおかずを屋台や店で買う女性が多い。専業主婦が殆どいないからである。会社、役所、様々な商売において女性の進出が著しい。伝統的にタイでは、僧侶になることとまつりごとに関わること(労役や軍役への徴用)が男性の重要な役割と

されたために、女性が家事・育児のみならず、生業や商売に従事しなければいけなかったという説もある。しかし、現在は、男性だけの収入では家や車、耐久消費財を買えないので、夫婦共働きをしていると考えた方がよい。必ずしも女性の価値が高く評価されて社会進出が進んだわけではない証拠に、タイの女性は男性に抑圧されているという知識人が多いし、庶民の女性は日本の専業主婦という身分をうらやましがる傾向すらある。

女性が料理する時間がないことに加えて、バンコクのような都市部では通勤時間が深刻である。世界有数の交通渋滞のため、朝晩 2 時間ずつかけて職場に通う人が少なくない。アユタヤあたりから通っているのかということではなく、せいぜい 10-20 キロ圏内である。今年から地下鉄が開業し、モノレールも走っているが、路線規模は人口 180 万の札幌程度。バンコクは 700 万都市。それ以上に深刻なのは、都市面積に対する道路面積が 8% 程と札幌の半分以下。しかも、道路の構造が魚の骨ようになっており、小骨である路地から車が背骨となる幹線に流れ出す。小骨同士を繋ぐ環状線が未発達である。一本隣の平行道路に出るのに大回りを強いらられる。さらに、クローン（水路）とチャオプラヤー川（日本ではメナム川、メナムは川の意で川・川というおかしな名に）が架橋の手間を取らせる。

ラッシュ時は、車、バス、貨物が道路を完全に埋めつくし、信号が変わっても前の方が移動するだけで、全体の移動には時間がかかる。平均時速 4,5 キロであろう。33,4 度の木陰もない道路を紫色の排気ガスを吸いながら歩く人はいない。エアコンのきくバスやマイカーに乗りたがるのは無理からぬことで、道路の整備が車の増加に追いつかないのである。

郊外によくタウンハウスを買った市民は朝の 5,6 時過ぎに家を出て、夜の 8,9 時に帰る。東京のような長時間通勤を、バンコクでは夫婦ともにやっていると考えてもらえばよい。料理する時間も気力もなくなろう。バスが通る道沿い、バス停付近には屋台が並び、一膳飯や総菜を出してくれている。一食 30-40 バーツ（100 円程度）も出せば腹一杯になる。バンコクは深夜までこうした店で活気がある。

おそらく、家できちんとした食事をとれる階層は、料理人や住み込みの家事手伝いを雇っている富裕層か外国企業の駐在者、或いは都心に店を構える華人系の人達である。水路か線路沿い、寺院裏、建設現場周辺のスラムの人達は、労働の後外食すると思われる。

都市のデパートやスーパーマーケットにはフードセンターがあり、平日は学生や涼みに来た買い物客、土日は家族連れでにぎわう。子供達や若者はマック、ケンタッキー等のファースト・フードを好むが、先の一膳飯より高い。ベトナム系の食事にカイ・ガタ（ソーセージを挟んで焼いたパンに目玉焼き、飲み物のセット）があるし、ガイ・トードという鳥の唐揚げもある。こうした安価なタイ料理は、中高年以上の嗜好であろうか。

## 2 飲酒と文化

### 2-1 タイで飲める酒

タイの地酒といえば、タイ米から作る泡盛に相当する焼酎（ラオ・カーオ）というものがある。これは蒸留酒であるが、どぶろく状態のサトゥーというものが東北タイでは特産

品として売られている。しかし、これらを愛飲するのは農民や労働者である。焼酎にリボタンD（グラティンデーンというタイのドリンクの場合も）でわって、ガラスコップにつき、一気に飲み干す。相当に効く。唐辛子をかじりながら、これを回し飲みするのが若い衆の飲み方である。旨いからというより、安いから飲んでいるのである。少し金ができれば、タイを代表するメコン（さとうきびウイスキー）にかわる。

町の人達はやはりビールである。タイ料理の辛さと高い気温にはビールが合う。それもぎんぎんに冷やしたやつであり、中にはコップに注いだとたんシャーベット状になる過冷却のビールもある。冷えたビールにさらに氷を入れて飲むのがタイらしい飲み方だろう。

私は味が濃く、アルコール度数高め（ライオン）のシンハ・ビールは1本が限界なので、2本はいけるクロススター・ビール（ドイツ風ピルスナー）を好む。オーソドックスなこの2つに加えて、ハイネケンがちょっと高級ビールの定番であり、他に安い食堂ではリオダの、チャンだのといったビールがある。店ではシンハ大瓶1本50-60バーツ（200円弱）。スーパーに行けば、ヨーロッパ、日本のビールも売っているが、タイの3倍の値段である。

勤め人や商売人が仲間同士で飲む際は、ジョニ黒あたりを店に持ち込むことになる。最近ではエアコンが一般家庭に普及しているので、ワインを愛好する人も増えているらしい。

タイの最低賃金はバンコクの1日171バーツ（2003年、約400円）から地方の130バーツ台まで開きがあるが、安いリオ・ビール5,6本分である。日本の最低賃金が日額5,6千円であるから、ビール15,6本は買える。これがラーメンであると、タイ、日本どちらも10杯程度食べられるので、やはり酒類の値段は相対的に高いといえる。外国人にとってタイの酒は安価であるが、一般の労働者で晩酌をやっていたら金は貯まらないだろう。

## 2-2 飲酒をめぐる作法と仏教

酒の飲み方でタイと日本を比べてみると、目上の人と飲む場合と女性の飲み方に差がある。タイの学生が教員と飲む時、或いは、職場でも部下が上司と飲む時はかなり遠慮する。まずはコーラであり、ビールも少しであろう。礼儀正しく、目上の人に尊敬の意を示す。その代わり、上に立つものは会食費を全てもつ。女性は人前では飲まないようにしている。

今の日本で学生とのコンパや職場の飲み会などは無礼講に近く、男女ともに酔っぱらうのが普通だろう。タイ人には想像しがたい。私は東北タイの中学校・高等学校に日本語教師を派遣するNPOの理事長をやっているが、日本人の若い女性教師がビールをぐくぐく飲むさまを田舎の人々が口を開けてみている話をよく聞く。男性は面白がってみるだけだが、女性はそうではない。夜の女性？と誤解されないように派遣前には注意を促している。

実際には、学生同士でディスコにくりだしたり、近しい間柄では男女ともに飲んだりするだろうが、タイでは飲酒に肯定的な価値が最初から与えられていないように思われる。

李白は酒一斗、詩百篇と杜甫が言っただけだが、中国には飲酒の詩文がかなり残っているらしい。飲み過ぎで吐いている図版も目にした。良寛和尚も酒に酔いながら歌を詠み、達筆を残した。日本でも酒は文化につきもののようで文人パーなる言葉もある。西洋では修道院でビールやワインが醸造されており、キリスト教は酒に厳しくなかったらしい。

タイは上座仏教の国で、国民の95%が仏教徒であり、憲法に国王は仏教徒でなければならぬとまで定められている。スリランカを経由してタイに伝えられた上座仏教とは、227の戒律をそのままに守る僧侶の僧団（サンガ）と、寺院・僧侶に帰依し、積徳行（タンブン）により功德を願う民衆の宗教である。タイの文化・道徳の中核は仏教であり、クーデターを起こした将軍がサンガの大僧正に挨拶にあって、政治的正当性の確認を行うほどである。

日本で仏教は宗教の一つなのであるが、タイでは文化・社会そのものといってもよい。男子は20歳以後出家し、比丘となることが通過儀礼のようなもので、農村部では今でも若者が雨安居の3ヶ月間や親族の追善供養として出家している。都市部では仕事で忙しく、なかなか出家できないようであるが、街中の寺院で僧侶の教説を拝聴したり、瞑想実践したりする中高年の男性も少なくない。女性は出家が許されていないので（比丘尼の伝統がないため）、主に聴聞、寄進の積徳行になる。

寺院は地域のコミュニティ・センターであり、功德を積みにくるもの、病氣直し・開運等の様々な祈願、車のお祓い等、庶民は生活全般にわたって僧侶に相談する。僧侶はただの宗教をやっている人間ではなく、特別な種類の人間であり、神通力すら使うと信じているものもいる。その昔は僧侶のみが読み書き可能で、沙彌になることで学問した。

その僧侶が在家に説く五戒は、殺さない、盗まない、邪な性行為をしない、うそをつかない、酒を飲まないことである。これに、装身具をつけない、歌舞をみない、ベッドに寝ないことを加えて八戒とし、正午以後食事をしない、財産を蓄えないことを加えると十戒になる。僧侶になれない女性はこの十戒を守る修行者になることが認められている。

仏教が公的価値であるタイにおいて飲酒に功德はないのである。タイ語では、怒りっぽいことをジャイ・ローン（熱い心）、冷静なことをジャイ・イエ（冷たい心）という。冷たい水と涼しい風を送るもてなしがよい。中国風に熱烈歓迎はよろしくない。こういう風土で、余計に熱くなる酒を飲むこともよろしくないであろう。家を捨て乞食となって、世間的な執着を断ち、自己の内観と世界の洞察を奨める本来の仏教に、酔いは必要ない。

酒に対して否定的なものは仏教だけではない。政府も選挙前には料理屋で酒を出さないよう、警察に取り締まらせている。度を超して飲み過ぎ、選挙に行かないものが出ないように。その効果で投票率が上がっているのか、買収された票であがっているのか定かではないが。タイの選挙は候補者が巨額の金を使い、票のとりまとめを行うことで有名である。

### 3 タイ社会と文化のゆくえ

#### 3-1 ポスト・モダンのタイとプレ・モダンのタイ

私は食文化の話をして、社会と文化の方に話がいつてしまう。ついででもあるし、私の研究とも関連づけて、タイ社会そのものの話をしてみたいと思う。エキゾチックなタイ料理、観光情報、タイ紀行は書店でいくらでも見かけるが、タイ社会が現在直面している問題等はあまり知られていないのではないかと。バンコクの交通渋滞はその一つにすぎない。

バンコク市内観光は寺院巡りに水上マーケット、象に乗れる民俗村訪問（ローズガーデン）等定番メニューがある。しかし、これは東京見物の際、浅草に行くようなものである。

汐留やお台場、六本木ヒルズ等の新名所、高層建築群はバンコクにもある。20階以上のビルは数年前ですら100棟を超えている。サイアムスクウェアからプルンチット通り周辺のショッピング・アーケード、デパート、高級ホテル。その先の高級ブランド店が入るエンボリウムをはじめ高層のホテルとコンドミニウムが林立するスクンヴィット通り。タイ随一にビジネス街であるシーロム通りのオフィスビル群等は、空を狭くしている。郊外には自家用車で買い物に行くモールやスーパー、シネマ・コンプレックスがある。これらはこの十数年の間の好調なタイ経済、市民の旺盛な購買力を象徴するモニュメントである。

観光は外貨の稼ぎ頭であるが、微笑みの国、農業国というイメージとは異なり、タイは家電・コンピュータ部品等が主要な輸出品である工業国である。情報通信業のタイクーンであったタクシン首相がCEO型政治を進め、インドシナ半島の経済的盟主を目指す国家である。前日本国大使であったカシット氏は、日本とタイの間でもはやODAは必要なく、対等な関係が結ばれるべきであると語っていた。タイの輝かしい社会発展を目の当たりにした日本人は誰も同意するだろう。日本の地方こそ公共事業、国内版ODAを必要としているという国会議員の主張には、私も北海道に住んでいて実感できる部分がある。

しかし、このようなモダンなタイ社会像に違和感を覚える日本人の少なくないだろう。貧しいが心豊かな農民、手つかずの自然、都市に広がるスラム、蔓延するエイズの脅威という発展途上国のイメージが、長年日本人に刷り込まれているからである。確かに、私がタイ研究を始めた十数年前は途上国であったが、今はその域を完全に脱している。日本のマスメディアや海外支援NGO/NPOは、いぜんとしてこのイメージを頼りにチャリティ活動の募金を行い、また、それに応える市民が数多い。それはそれで半分は正しい。

教室の子供達の目の輝き方は日本の比ではない。私の関わるNPOの日本語教師が教師体験の感動を語ってくれる。しかし、町の子供達はテレビゲームに熱中し、思春期の子供を持つ親は、Enjo Kousai（そのままに発音）が気がかりである。自然に関しては、森林の減少率で述べたように、タイの森林面積率は日本の三分の一程度しかない。農業も資金がないから粗放的自然農法なのであって、輸出用の農作物には国内水準以上の農薬を使用している。タイのスラム住民は、公有地や私有地（鉄道・道路沿い、沼地・水路等）に許可なく住宅を建築し、生業を持ち家族で暮らしている人々であって、先進国のホームレスではない。都市計画が人口増加に追いつかず、住宅・宅地造成を民間ベースで進め、地方から出てきた労働者階層のために公共の住宅供給が間に合わないことがスラム問題である。

2004年7月11-16日の間、160カ国から1万7千人が参加して第15回国際エイズ会議がバンコクで開催された。急増する感染者への対策、製薬会社の高価すぎる治療薬の問題が論じられた。北タイの山地民、貧困な山村ほどHIV感染率は高い。国内の買春産業に従事したもの、利用したものの相互からの感染、母子感染等経路は様々である。会議期間中、感染防止の特効薬としてコンドームが至るところで配布されたいが、貧困問題を度外

視した対策はありえない。近年はミャンマー、ラオス、雲南省タイ族の中国人、カンブチア等から女性をタイに連れ込むブローカーのルートが指摘されている。

既に、貧しい農村というイメージの歪みを指摘したが、これも政府が農村開発を 1960-70 年代の経済社会発展計画で謳いながらも、米仲介業者・輸出業者の組織力に手をつけずに、米価格を世界で最も低いレベルに据え置き（国際的競争力を高め！）、農協組織形成が遅れたことが条件不利になった主要な要因である。選挙の時だけ金で票を買う地方の国会議員も問題であろう。金を出してくれた特定の支援者にコンセッションの利権を与えても、当選後に選挙区のために中央から金と仕事を持ってくる国会議員が少ない。

タイは東南アジアの中では社会階層間の差異、中央と地方の地域格差が大きい社会である。1999 年時点で、最上位 20%の所得世帯が得る所得はタイ全体の半分を超える。対して、下層 40%のそれはわずか 14%にしかない。タイ東北部の平均世帯所得はバンコクのその三分の一以下である。このような格差は新自由主義の経済政策、グローバリゼーションが進むほど拡大していく。日本がタイに対して抱くイメージは、社会発展に取り残された部分、経済成長のひずみという、タイのプレ・モダン的部分であり、ODA 供与が自明視され、NGO/NPO が地域開発や様々な社会的支援活動をなす領域である。おそらく、タイが社会的財の再配分のシステム（相続税や累進課税）にまともに取り組み、それを財源として福祉的社会政策を行うならば、プレ・モダンの社会問題のかなりの部分改善できる。

私がタイのプレ・モダン、ポスト・モダンという言い方をするのは、モダンに相当する社会的基盤が弱いからである。本人の能力、達成した業績に相応する社会的報酬が受けられること。宗教や民族、性の差異によって差別的待遇を受けないこと。医療・年金等の社会保障により、最低限の生活が確保されていること。タイではこれらの諸点を充実させるべく、市民社会の形成という課題で、1990 年代から知識人、NGO/NPO の活動家が主張し、民主的な新憲法を制定するなど政府も取り組んできたが、十分な成果を得る前に 1997 年のアジア経済危機により、福祉国家への道は頓挫した。タイ経済・社会の立て直しは、新自由主義経済に委ねられ、既に述べてきたような階層間、地域間格差の拡大につながった。

微笑みの国タイの笑みには様々な含意がある。婉然と微笑む。追従の笑み。困惑の笑み。諦めの笑み。それらが渾然一体となしているから、タイには笑みが溢れているのである。

### 3-2 日本の暗さとタイの明るさ

社会の明るさ/暗さを示す指標として自殺率を考えたい。自殺というのは、将来に希望を失った個人の心理状態に由来し、家族や社会のサポート力の低下が促進する現象である。

フランスの社会学者エミール・デュルケムは古典『自殺論』の中で、欲求願望と達成結果との落差に失望するアノミー的自殺（失恋、失業、失敗等）が、近代に増加していくことを予言している。社会的規制がなくなり、誰もが自由に生きることができる社会は、一見明るさに満ちているが、自己責任が問われ、失敗を世の中の理不尽さ・人生の不条理として片づけることを許さない厳しさがある。仕方ないと本人も周りも諦めきれない。

日本の自殺者数は、長引く景気の低迷やリストラによる失業者の増加のせいで年々増加

し、過去 1,2 年は年間 3 万人を超えている。交通事故死者数の約 4 倍である。自殺率（人口 10 万人中の自殺者の数）をみると、北欧・東欧の一部の国よりは低い、アジアの中で最も高い。タイでは経済危機の 1997 年に男性の自殺者が一気に増加したが、日本と比べて三分の一以下である（2002 年、日本 25.2、タイ 7.7）。これでも近年の急激な経済の変動に伴うストレスの増加で自殺者が 20 年の間に 1.5 倍以上になっているのである。

経済水準、社会保障、進学の手機、或いは政治・社会参加の手機、どれをとっても客観的には日本の方が恵まれているだろう。タイの年間一人あたり平均国民所得は 2,000 ドル（日本、同 37,000 ドル）。公務員をのぞいた労働者、農民対象の医療保険・年金の制度がない。大学進学率は 10%程度（日本、同、50%弱）であり、親が富裕な農家、都市中間層以上の子供達にのみ可能である。1997 年の新憲法では、国会議員の資格は大卒以上と規定された（おそらく国民の 90%以上に被選挙権がない）。

こうした数値を列挙しても、もはや日本では豊かさや恵まれた環境に思いが至らない、当たり前になっている時代状況があり、そこでの失敗や成功できそうもないという予測に人は希望を失っているのだろう。勝ち組・負け組という言葉が頻繁に使われるようになったのは 1990 年代頃からだろうか。最近は勝ち犬・負け犬なる言葉まで登場した。これは、既婚で子供あり、稼ぎのある夫の専業主婦か、共働きの妻が勝ち犬で、30 代後半以降の独身女性がいくら総合職に就いていても負け犬なのだという。一般常識であっても、臆面もなくこのような言葉が流通するようでは、精神性の貧困ぶりを露呈しているようなものだ。

社会に出るのをためらう、社会で傷ついて立ち上がれないために、親の世話を受けながら、自室にこもる青年が近年日本では「引きこもり」として注目されている。その数は、数万とも数十万とも言われる。この若者達は、成功への強迫観念が強く、完璧主義だったのだろう。完全にうちひしがれる前に、自分を守るべく部屋に閉じこもったわけである。

こうした日本の社会状況を見るにつけ、タイの明るい陽射しと生活をそれなりに楽しむ人生観が好ましく思えてくる。タイの地域社会を研究して、山積する社会問題に呆然としつつも、なお、タイに毎年通いたくなる理由は、タイ料理とビールのうまさに加えて、社会の明るさではないかと思う。薬物中毒者やある種の無頼漢を除けば、働くことと交際を楽しむことに疑いを持つようなタイ人はいないだろう。社会的矛盾思い詰めないというのは、社会学をやる上ではどうかと思うが、生活する知恵でもある。人生の矛盾は上座仏教がそれなりに解決してくれる。物事、財、人間関係に執着しすぎることは心の平静を乱すと。静かに座る瞑想。歩行することだけに集中し、自分の身体に気づく瞑想。こうした日常生活をサポートする宗教文化や、家族・近隣社会の暖かさが、まだまだタイには残っている。旅行者であっても感じるすることができる明るさや暖かさである。

読者の皆さんには、タイに是非足を運んでほしいし、既に行かれた方は、レピーターになってもらいたいと思う。

参考図書（推薦図書）

綾部恒雄・石井米雄編、1995年、『もっと知りたいタイ』弘文堂。

石井米雄監修、1992年、『タイの事典』同朋社。

櫻井義秀、2004年（刊行予定）、『東北タイの開発と文化再編』北海道大学図書刊行会。

ニティ・イーオシーウォン、2000年、吉川利治編訳『当てにならぬがばかにできない時代—タイの社会と文化』NTT出版。

プラティープ・ウンソンタム・秦辰也、1997年、『体験するアジア—ボランティア夫婦の日本・タイ共生論』明石書店。

ヘンリー・ホームズ;スチャーター・タントンタウィー、2000年、末廣昭訳『タイ人と働く—ヒエラルキー的社会と気配りの世界』めこん。

前川健一、1988年、『東南アジアの日常茶飯』弘文堂。

前川健一、1998年、『バンコクの容姿』講談社。

前川健一、2001年、『タイ様式(スタイル)』講談社。

櫻井のタイ関係ホームページ <http://www.hucc.hokudai.ac.jp/~n16260/>